

昔からの記述が次第に縮小され、高炉や転炉の絵図はあるものの銑鉄（炭素を約4%含む）、鋼鉄（炭素量0.02~2%）という程度で、含有量をPPMで制御し、薄板の平坦度や厚さをミクロンレベルで制御している等の現実が登場しない。授業での扱いや何かの機会がない限り、彼らに車や超高層ビル、橋梁、新素材などを生み出す「鉄の魅力と可能性」への関心は芽生えようがない。何事につけても出合う機会もないようでは興味・探究心は湧き起り難く、鉄鋼業については3Kイメージの浸透にみるようにマスコミ情報の影響が大きくなる。数年来、憂慮されている理工系離れもこれらのことと無関係ではない。可能性・創造性そして興味関心度の大きい若人が、ものづくりと遠い距離に置かれていることは極めて不幸といえ、更に科学技術立国を必須とする我が国にとっては見過すことができない現実であると思う。このような状況下での今夏の研修は、大変有意義であった。事前に送付された資料や質問・懇談内容調査で「鉄鋼の今」をあらかじめ学習でき、現地研修では事前の調査に基づく

あとがき

三輪 能久
(マツダ(株)技術研究所)

明けましておめでとうございます。会員の皆様には新年を迎えられ、気持ちも新たにされていることとお慶び申し上げます。

思い返せば、昨年は夏場に記録的な長雨が続き、梅雨明けもはっきりしない気象異常の年でした。台風にも例年になく多く見舞われ、特に戦後最大級といわれた13号には前々年の19号の記憶も新しく大きな緊張を強いられました。被害の大きかった九州地方に比べ中国四国地方は大過なく済んだことは不幸中の幸いというほかありません。一方、経済面でも急激な円高が進展し、景気も底が見えないまま低迷するなど大変な一年でした。今年こそは、明るく良いことの多い年でありたいと念じずにはおれません。

さて、第3回目となる今月号の支部だよりは中国四国支部が担当しました。編集にあたっては、たたら製鉄を発祥とした素材型産業が集積する本支部の特徴を出すこと、および情報記事としてわかりやすく読んでおもしろいものにする、の2点を基本方針としました。広島大教授・福永秀春委員長のもと約3か月の編集作業を経て、おおよそ当初のねらいどおりのものにできあがったと納得しております。なかでも「中国四国地方

グループミーティングはじめコンピュータ管理の最新設備と先端技術を駆使した鉄づくりに触れ、教育の現場では得難い多くを学び知ることができた。特に徹底した省エネ・環境対策、廃棄物を宝とし発生物を有効利用するなど資源・エネルギー利用システムの見事さに感服するとともに、ヒューマンカンパニーを掲げての環境対策は環境教育のすぐれた先取り実践モデルといえ痛く敬服した。硬くて強く、ファインでさびず、強く粘り等々の鉄の魅力の数々を、ブルーピンクに輝きたぎる高炉や転炉に入れられる溶銑のすごい迫力と感動を織り混ぜ、彼らに伝えたい。身を乗りだし目を輝かせて聴き入る彼らを思うにつけ、青少年をとりまく科学教育の実情から、メセナ事業に青少年のためのものづくり教育への支援があればと願うものである。終りにこの研修にご尽力下さった関係各位に深く感謝申し上げますとともに、人類の夢と地球へのやさしさをのせて翔く鉄の翼に限りない期待を寄せるものである。

の研究機関・企業の紹介マップ」はユニークな逸作と自賛しておりますがいかがでしょうか。限られた時間内の編集でもあり、執筆者の方々には種々ご無理をお願いしました。この場をお借りして御礼申し上げます。なお、鉄鋼産業に関連して造船、自動車などの鉄鋼材料を利用した産業や素材型産業における環境・リサイクル対応への取り組みなどについても触れたかったのですが紙数の関係で割愛させていただきました。これらにつきましてはまた次の機会にしたいと思います。

おわりに、今回の支部だより編集は私たち自身にとって自ら所属する地域に対する認識を新たにする機会でもありました。全国の会員の皆様におかれましても中国四国支部をより深くご理解いただくのに多少ともお役にたてば幸いです。

『鉄と鋼』ISIJ情報ネットワーク「支部だより」編集委員
福永秀春（広島大学・工） 川瀬尚男（日新製鋼・鉄鋼研）
吉村博文（新日本製鉄・光技研） 佐伯祐治（川崎製鉄・水島）
野村義一郎（東洋鋼鈹・下松） 畑山東明（広島大学・工）
三輪能久（マツダ・技研） 小林義雄（三菱重工・広島研）
小林泰男（NKK・福山研）

日本鉄鋼協会中国四国支部
〒730 広島県広島市中区八丁堀4-16
TEL.082-221-2682 FAX.082-223-5650